

よしかちよう
吉賀町木の駅プロジェクト（島根県）

本気が連鎖する地域と学校

「受け入れてもらえた」

「昔の風景に戻ったようで懐かしいねえ」。夕闇の中で、廃校跡にある木の駅の土場を一人で片付けていた小林健吾さんは、見知らぬおじいさんから声をかけられた。

「新しい中学校ができたところは、昔は貯木場で……」。問わす語りにポツリポツリ話す姿に接した時、初めて「やってよかった、受け入れてもらえた」と心底思った。

小林さんは35歳、7年間の東京でのサラリーマン生活に見切りをつけて、2009年11月に「地域おこし協力隊（※）」として吉賀町に赴任した。着任の翌朝、窓を開けた瞬間目の前に広がる紅葉の

美しさに息を飲んだ。季節の移りを感じることなく過ごしてきたこれまでの都会暮らしを振り返った。「どうしてこの生き方を？」と問われるたびに、この日のことを話すようになった。

吉賀町柿木村は有機農業の先進地で、先駆的なことやイターン者を地域は温かく受け入れてきた歴史がある。96%が森林で過疎の村をどうするか、山村再生のきっかけ作りを探す中で木の駅プロジェクトに出会った。2011年春から高知県仁淀川町や鳥取県智頭町などを視察し、2012年4月に実行委員会を立ち上げ、6月2日にはプレテストとして小さく始めた。出荷者14名のうち5名が山を保持しないイターン者だった。彼ら

を応援する地元山主たちは、彼らに山も道具も技術も提供した。

本気と成果

川本隆光さんはそんな応援団の一人であり師匠でもある。持ち山に道を付けて「山の学校」を主宰し、子どもらに山仕事や原木シイタケを体験させている。村上貢さんは木の駅実行委員長で、「山の学校」のお手伝いから木の駅につながった。二人の口癖は「子どもを育ててやいかん、仲間作りが一番大事」。川本さんらにとつては、イターンの彼らもかけがえない子どもなのだろう。チェーンソーの扱いから搬出まで丁寧に教え、持ち山を提供したり山主の友人を紹介したり世話を焼く。有機

農業を志してきたイターン者達は、「農だけでなく農林だったんだよね」と視野が開ける。地元の県立吉賀高校も反応し、美術部が地域通貨のデザインを担った。

1カ月で60tが集まり、隣町のチップ工場へ出荷した。1t6000円を地域通貨で支払い、発生した逆ザヤは小林さんから主要メンバーの負担と寄付で賄った。当初から温かく見守っていた吉賀町役場は、その本気度と成果を高く評価し、10月末からの本格実施には助成金を手当てした。2カ月で21戸81tが集まった。さらに、11月で地域おこし協力隊の3年の任期を終えた小林さんを臨時職員として採用し、木の駅の運営と町内他地域への普及を任せた。

※総務省による制度。地域おこし協力隊員は、地方自治体の委嘱を受け、地域で生活し、各種の地域協力活動を行う



◀右から小林健吾さん、川本隆光さん、村上貢さん

▲旧柿木中学校と木の駅土場

中学生も木の駅へ出荷

町内の蔵木地区では、2013年7月から木の駅が始まることになった。これまで説明会を繰り返してきたこと、イターナー者らの働きかけがきつかけで広がった。蔵木中学校は全校生徒数21名の小さな中学校。昨年は課外授業で「森の健康診断」に取り組んだ。今年は調査から選木・伐木に加えて、搬出して木の駅に出荷することにした。そのあと商店で地域通貨を実際に使うことまでやること



▲「山の学校森林塾」でチェーンソー研修



▲昨年の蔵木中学校での「森の健康診断」



▲「本物に触れさせたい」と語る大畑校長

になった。大畑信幸校長は言う。「森を守ることは村を元気にすること。自分たちの伐った木を出荷し、地域通貨を手にしてお店で使うことで、みんながハッピーになることを体験させたい。それが将来のUターンと定住につながる。何より、本気で必死に取り組んで

いる小林さんという人間に触れさせたい。生徒らは本気に必ず反応する。

蔵木の土場なら校庭の一角を使えばええけん。木が積んである風景、じつちゃんたちが軽トラで元気に運んでくる姿を生徒たちに見せたい」。大畑校長こそ本気だ。

一人のイターナーの若者の本気と、それを放っておけない山里の人々。互いに思いやり巻き込みあいながら、地域も山も学校も子どもたちも変わっていく。木の駅がもう一つの学校になり始めている。



▲吉賀高校美術部デザインの地域通貨